

巻頭

エッセイ

人の前で
話をするということ

小島 麗逸

2017年の夏期公開講座案内をみると、11コースあり、対象地域もアジア・中近東・アフリカ・ラ米に及び、さらに特定個別テーマで地域を横断するコースも設営され、各コースとも数人が登場するという豪華版で、講座の充実ぶりに驚く。1979年公開講座開設の必要性を言い出した者としてうれしく思う。

公開講座開設以前、ジェットロ支部が置かれていた主要都市でアジ研職員の出張講演がたまに開催されていた。取り上げるテーマはジェットロ出張所と広報部との打ち合わせで決めていた。中国に関する講演会が比較的多く、北は札幌から南は那覇まで何回か地方巡業をしたことがある。毎回困ったのは、来てくださる聴講者の関心がどこにあるかを測りかねたことである。当方は情報や調査研究内容の供給者であるが、聴講者はその需要者である。つまり需要予測ができなかったことだ。そこで当日、宿を出てタクシーを拾い、「1万円分走ってください。最後は県庁か市役所の前で降りて」と頼み、車中で当該市の景気の話聞く。とくに盛り場の賑わいの話は役に立った。当然、中国に関する質問も数多くした。県庁か市役所から市民用の基礎統計が掲載されている小冊子をもらい、いっきに頭の中に叩き込んだ。これをやると、演壇に立っても足がふるえなくなった。聴講者の要望が少しわかるからだ。

話の組み立ては初代所長の東畑先生のお話が役立った。先生は座談会や講演の名手と言われてい

たが、ある時、どうしたらうまくいくかと伺ったら、「タネを1つだけにすることだ。15分の場合も60分の場合の講演でも同じだよ」と言われた。言いたいことを2つ以上入れると散漫になるということらしい。これを取り入れるにはかなり時間がかかった。知っていることを何でも話そうとするからである。今日の話が聴講者に浸みわたり始めたと思えるようになったのは聴講者に居眠り者がいなくなり、当方の話に相槌を打つ人が出始めてからである。

経済社会現象はある一定時間を経ながら段階を追って変化して行く。ある事象は数年の期間のこともあるが、20～30年の期間で新しい段階に入る事象もある。何がこの変化をもたらすかをとらえる歴史感覚が必要であるように思う。東畑先生が言われた講話のなかを貫く1つのものとは、この歴史感覚かもしれない。

発展途上国研究は前世紀に比すと驚くほど拡がり、情報の量や調査研究の成果の供給は無限といえるほど増加した。1980年代までは、アジ研はある意味で独占的供給者であったように思う。途上国に関する情報や調査研究の成果の供給と需要との関係は、前世紀とは逆転し、需要者側が供給者を選ぶ時代に入っている。公開講座の担当者は来聴者が1コマごとに支払う聴講料と聴講に来るために支払う時間コスト分を提供する必要がある。これができない登板者には入山料的なものを支払わせるのも一方法かも知れない。

プロフィール

こじま れいいつ／

長野県飯田市出身。1960年以後アジア経済研究所で中国经济研究に従事。1987年以後大東文化大学教授。2003年理事、学部長を経て退職。他に北京大学旧経済学部客員教授、早稲田大学政経学部非常勤講師などを歴任。現在、山梨県山村で農業に従事。